

### 3. 特別寄稿

思いつくまま

天田高白

私が筑波大学にお世話になったのが 1978 年、時代を先取りして全国ではじめて創設された学際的な大学院環境科学研究科の教員として赴任しました。

大学自体も創設期で若さがあったと思いますが、環境科学研究科は、社会のニーズとあいまって若いエネルギーに満ちあふれていた。研究科を構成する教員は 11 学系にわたり、教員と学生が一体となって環境知を追求し、現地で直接問題点を把握し、解決のため研究手法を身につけさせようという方針で、北上川流域をはじめ多くのプロジェクトが実施された。故辰巳修三研究科長を筆頭に川喜多二郎、橋本道明、佐々波秀彦、河村 武、岩城秀夫各先生をはじめそうそうたる教員が学生と寝食を共にしながら教育・研究に傾注し、現在の研究科の土台をつくり、また環境科学の学会創設の中心的役割を果たしました。

退官までの 10 年間は大学の社会における位置づけが大きく変わろうとしていることをひしひしと感じました。従来、大学は社会の外にあって、教育した人材を社会に提供する機関でしたが、大学が社会の真只中に位置づけられ、企業・官庁と競争ないし連携を要請されるようになった。社会の変貌の速度は速く、独法化も間近に迫っていますが、大学の使命はなによりも教育にあることを肝に銘じておくべきだと思います。

退官して暇になったせいか、色々な角度からゆとりを持って物が見られるようになりました。

1. 環境研究について： 業と言ったらよいのでしょうか、人類は際限なき夢と欲望の追求、ひたすら利便性と豊かさを追求してきた。これに対応してこれまで発展してきた科学は対象を要素にわけた個別分析的科学である。これに対し環境研究は環境を部分的に利用する個別分析的研究と異なり、環境を総体として保全修復する研究であり、問題解決しなければ意味がない。理念手法とも全く異なる。地球環境の場合、患者である地球の代わりはない。まさに手遅れは許されないのである。両者いずれにしても扱うのは人間であり、人間の生存を脅かす危機を孕む現在文明相応しい哲学が要請される。

2. 環境科学研究科について： 高度経済成長期の急激な乱開発が引き起こした環境汚染は様々な公害を顕在化させた。そうした社会的背景から、新構想大学の目玉として、独立修士課程環境科学研究科が複雑な環境問題を診断し解決しうる高度職業人を養成するため、名実ともに学際的領域横断的な教育・研究機関として設置された。日本での環境科学教育・研究の草分け的存在でした。旧来の学問体系に大きな刺激を誘発し、大学と社会のあり方にも変化を与えてきた。環境科学は専門領域を越えた新しい学問であり、まさに今世紀的でもあります。すでに 2 千人余の修了生が社会で活躍しています。以来 25 年を経た今日では、環境とか総合とか名前の付く学科や研究科はどの大学にもみられるが、中身を見ると本学のような学際的領域横断的な研究科は少ない。地球環境の危機が予見され、問題解

決への社会の要請が一層大きくなり、予算的措置もとられた。ここ数年の間に有名大学では環境学研究科の博士課程が創設されてきた。残念ながら本学はこの問題に対し社会の要請に応えうる十分な体制になっていない。本学創設期の目玉であり、日本の環境教育・研究の推進役を果たしてきた本学において、未だに博士課程が実現されていないのである。

3. 急ぎすぎる人類： ドッグズイヤーと云われるように、情報技術の進展により変化の速度がめっちゃめっちゃに速くなっている。ITだけでなく遺伝子工学、ナノテクノロジー、ロボット工学など様々な技術がお互いに相乗効果を与えながら加速度的に発展し、科学技術界だけでなく、政治、経済も含め怒濤のようにある方向に向かって走っているように見える。我々人間は否応なくこの流れの中に呑み込まれていく。国際化、情報化の進展により、あらゆる事柄が競争、競争でスピードアップし、それにつれて消費されるエネルギーも際限なく増大していく。これが現代のありのままの姿であろう。人類を滅亡さすかもしれないこれらテクノロジーは開発者に利益を生む商品として民間で開発されており、国家の管理を離れている。ユビキタス社会は情報そのものが兵器で、乗客全員が墜落ボタンを押せる飛行機にいるようなものと指摘する人もある。際限ない欲望の追求、経済至上主義はすでに人間をそして社会を狂わせはじめている。根元は、このスピードに人間のリズムがついていけないところにある。人間は正常であるためには退屈な時間、ゆとりを必要とするからである。私は退官してゆっくりと登山を楽しめるようになり、四季の変化を一層感じるようになった。一木一草、植物はしっかりと体内時計を内在しており、季節に合わせて色とりどりに自分を表現する。人間も本来自然と接することにより四季の移ろいを感じ、生活リズムが形成された。知や情感が刺激されて生活の営み、文化、芸術の土壌となった。進歩は善という思想は疑うべきだ。

4. 循環型社会の再生： 私は専門が流域管理学ということもあり、森林や河川と絶えず接してきたが、森林山地の生態系は生産、消費、分解の循環システムを備えており、その営みは循環型そのものである。かつては里山、田園といった農村の原風景がそれであり、都市も流域を中心にみごとな循環型社会ができていた。それは川で水泳ができていたことから理解できる。高度経済成長期に流域を中心とした都市生態が崩壊し、環境汚染を引き起こしたのは、経済至上主義のもとで、技術も生産、消費システムのみに力を入れ、分解処理技術やシステムへの取り組みがなおざりにされたまま、利便性と経済性のみから加速度的に大量の商品が開発されてきたからで、都市で消費され排出される膨大なゴミや産業廃棄物が、投棄されてきた。それは大気、水、土壤に深刻な環境汚染を引き起こしている。企業はリサイクルができ、安全に分解できる技術を持った商品開発を行う責務がある。私たちは、失われた、流域を中心とする循環型社会の再生に傾注すべきである。